

# 楽浪郡設置前後における東北アジアの外交研究

中村大介（教養学部・准教授）

## 1. 研究目的

本研究は、楽浪郡が成立する前後における漢の、弁・辰韓や倭などに対する外交政策の実態を明らかにすることを目的としている。その際、実質的な戦力或いは脅威となりうる鉄製武器の数量と種類に着目し、各政体に対して漢のとった方針の推定を行う。

この時期、鉄製武器の数量は、日本列島の倭と比較して、概算でも、楽浪郡に近い朝鮮半島南部の弁・辰韓に多い。そのため、漢にとって注意すべき存在は倭ではない。しかし、中国からもたらされた銅鏡などの威信財は倭に多く、弁・辰韓では少ない。また、鉄製武器の型式も、弁・辰韓は漢とは異なる型式をもち、倭は弁・辰韓と漢でみられる型式をもつ。こうした内容から、漢の外交に差異があることがわかるが、これまでの研究では、倭の鉄製武器はランクの下がる副葬品と理解され、数量の把握等の具体的な検討が欠けている。そのため、より精度の高い日韓の比較検討が行えていない状況である。そこで、本研究では①日韓の鉄製武器の数量と型式、②墓での鉄製武器と中国製品の対応関係の検討を通じ、当時の状況を明瞭化することで上記の目的を達成したい。

## 2. 研究の進め方

上記の研究目的をもとに、九州の資料調査に行き、鉄製武器の集成及び、遺物観察を行った。また、朝鮮半島については、日本学術振興会による科学研究費の調査を利用し、本プロジェクトにおける不足部分を補った。その結果、朝鮮半島、九州北部の鉄製武器の集成と形式的検討を行うことができた。次項でその成果の概要を示したい。

## 3. 研究成果

楽浪郡の設置後、北部九州の政体は漢から大量の鏡を入手し、弁・辰韓地域の政体とは異なる副葬品体系を成立させた。現在、この日韓の墓制における差異の要因は、両地域における鏡の社会的意義の相違や、楽浪郡内の交流対象の差異などで説明されている。しかし、弁・辰韓地域では短茎鉄剣、北部九州では漢に由来する長茎鉄剣と素環頭刀というように鉄製武器にも差違があり、鏡の社会的意義の相違にとどまらない差違がみられる。また、倭の交流対象が漢及び楽浪郡上位層、弁・辰韓地域の交流対象が楽浪郡中位層であったとしても、中位層にも漢の武装は普及していることから、交流の差異のみでも説明が難しい。そこで、本研究では鉄製武器に着目し、当時の楽浪郡から北部九州までの武器系統を検討した。

その結果、漢の長剣・刀は倭には与えられたが、弁・辰韓には与えられず、後者は楽浪郡内の中・下位層を通じて短剣を入手するにとどまることが分かった。このことから、漢は倭に大きな鏡のみならず、自国の武装の一部を与え、明らかに外交的に北部九州の政体を厚遇するという方策を取っていたことが判明したといえる。漢は弁・辰韓地域と明確に区別して倭との外交を進め、本来、鉄製武器を多く持たない倭にそれらを与えていたのである。この目的には、朝鮮半島と北部九州の武装の平準化し、地理的に楽浪郡と接する弁・辰韓を抑える目的があったとみられる。

つまり、問題として取り上げられてきた両地域の差異は、楽浪郡維持という漢の外交政策に起因すると結論づけられる。後漢代に入って奴国が金印を下賜され、いわゆる東夷の地域において最上位に近い地位を与えられたのも、王莽の混乱期に運良く楽浪郡が保たれたため、倭の役割に一定の評価が下されたためと推定されよう。

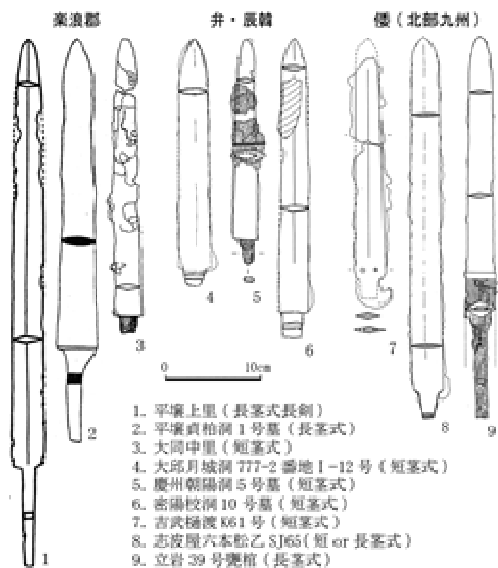


図1 楽浪郡、弁・辰韓、倭の鉄剣

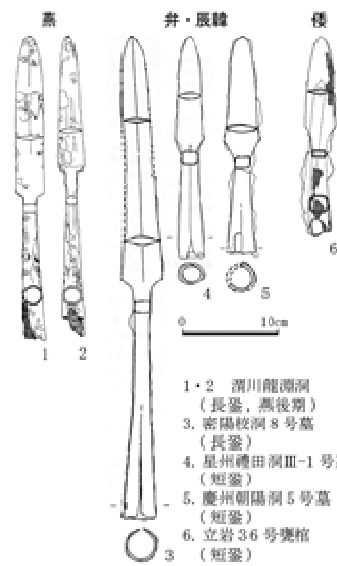


図2 弁・辰韓と倭の鉄矛

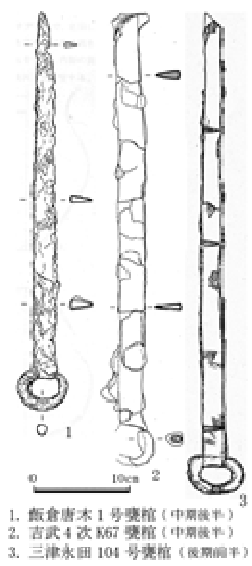


図3 倭の素環頭刀

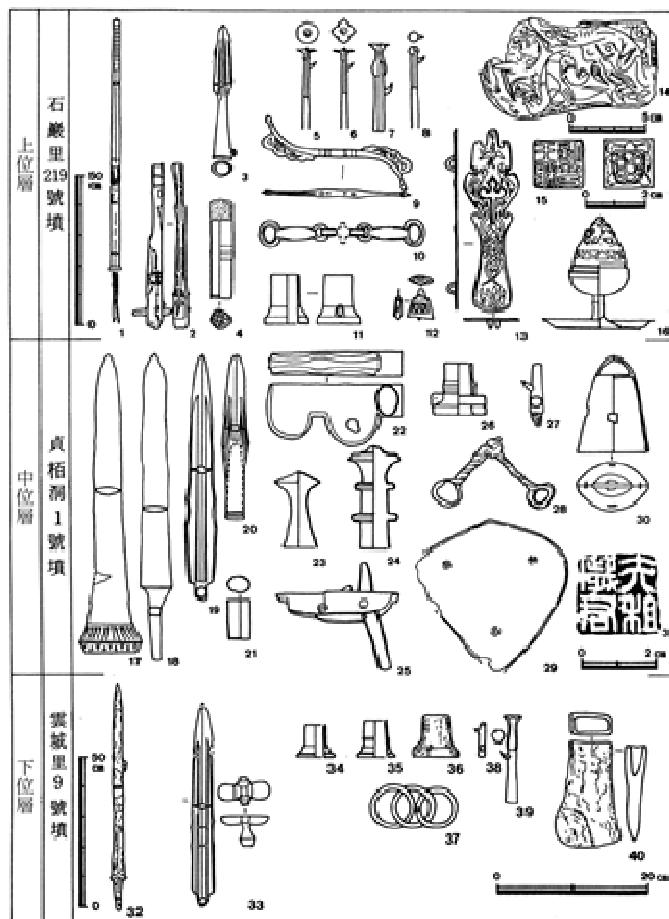


図4 楽浪墳墓の階層 (高久 1995 を改変)

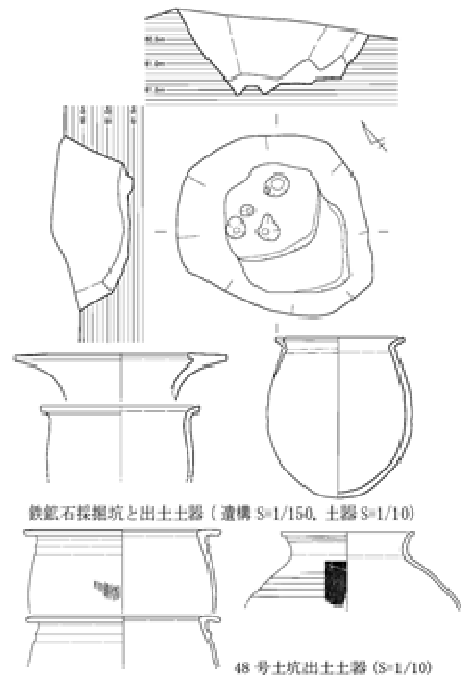


図4 蔚山遼川の鉄鉾石探掘坑と外来土器

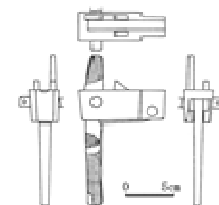


図4 永川龍田里収集弩